

## 断捨離できないことがある



一般社団法人北師同窓会

会長 佐々木 一 壽

昭和四十四年卒

我が家に『断捨離のすすめ』という本がある。誰が買ったのかわからないが家内だろうと思う。その家内も断捨離できずに娘たちからせつつかれていた。そしてとうとう私にその番がまわってきてしまった。私はというと相当整理したのだが、問題は書物である。その中で学生時代に読んだ小説類は捨てることが出来た。また、教員になってからの書類なども思い切って整理することが出来た。しかしどうしても思いきれないものがある、まだいっこうに本棚はきれいになっていない。迷うのは自分にとってなにかの記憶になっている本である。子供たちからは、「誰も読まないのだから捨てればいいでしょう」と再三云われるのだがその本を捨てることは自分の体の一部が切り取られるような感覚になってしまい捨てることができないでいる。

教員になってから日記も書き続けてきたが、本もこの日記の一部になっている。二十代、三十代、四十代とその時々読み漁った本が並んでいる。三十代の前半に読んだ上田薫さんの本などは私にとってはバイブルである。上田さんの本は、平易な文章でわかりやすく優しさにあふれている。いつ読んでも、心から勇気が喚起される。上

田さんの本に出会ったのはまったくの偶然だが、心から感謝している。

一方、三十代の頃の日記には先輩から言われたことがたくさんメモされている。指摘されたことがその時はよく理解できなかったが、きっとそのうち役に立つに違いないと懸命にメモしたものである。他人の授業を見ての感想も数多く残されている。どれほど役に立ったことか。本や日記にはそのような出会いの足跡が残されている。だから、とても捨てることが出来ないのだ。

捨てられないと言えば母もそうだった。母の場合は衣類だったが、亡くなった後に家を整理すると、狭い押入に昔使ったと思われる品物がびっしりと詰まっていた。私と違うところは、きれいに整理整頓されていたことである。「使わなくなったものを、なぜこんなにとっていたんだらう」と思ったが、母にとって衣類は物を大切にするといい昔ながらの教えであったと共に、自分の人生の記憶だったのだろうと思う。

ある本に「自分という存在をどう確定するか」という小難しいことが述べられていたが、その本では、「自分の意識と繋がっている外部のものを含めて」と述べられていたことを思い出した。「自分」は自分の身体だけではないということらしい。

手元の断捨離の本には、「モノを捨てればうまくいく」とタイトルが書かれているが、なかなかそうはいかないことがあるものだと思う。別に断捨離する必要がないと言っているのではない。むしろ、私もいつか大切な本も日記も、そして記憶も捨てなければならぬ。それがいつなのか実は分かっているのだが、分かっているように振る舞っているのかもしれない。その時が来るまでは本や日記とつき合っていかなければならないと予感している。



## 札幌校創立 百三十周年に向けて

北海道教育大学札幌校前キャンパス長

渡部 英昭

いつも北師同窓会の皆様には札幌校の教育・研究活動にご支援、ご協力をいただいておりますことに、心から感謝申し上げます。すでにいろいろな機会に報告していますが、この度、札幌校は教員養成改革を行い、平成27年度からフル規格の教員養成校になりました。具体的には、小学校教諭、中学校全教科、特別支援、養護教諭の教員免許が取得可能となりました。北教大の平成18年改組で、音楽、図工・美術、体育、技術の各教科に関する教育組織、研究組織がなくなりりましたが、教育委員会、校長会、教育現場からの強い要望があり、この度、復活しました。今後の小中一貫教育、小中教育連携を見据えて、それぞれの教科指導、特別支援教育、及び養護教育の専門に強い教員養成を推進していきます。

さて、札幌校は来年（平成28年）で百三十年の歴史を刻むこととなります。札幌校が藻岩山麓からあいの里の地に移転してきたのは昭和62年春で、それから三十年の月日が経過したことになります。キャンパス移転時、百周年記念式典を盛大に行ってから札幌校は周年行事を行ってはいませんでした。札幌校は先人の伝統を引き継ぎつつも、常に新しい時代の要請に応えてきました。来年、百三十年記念事業を行い、札幌校発展への新たな契機としたいと考えています。先般、学内に「札幌校創立百三十年周年記念事業準備委員会」を

設置しました。これから細部を詰めていきますが、平成28年10月1日（土）に札幌全日空ホテルでの記念式典と祝賀会の開催、創立百三十年周年記念誌の編纂を予定しています。今後、北師同窓会会員の皆様のご協力とご支援をお願い致します。

移転から三十年が経過し、藻岩校舎で学生諸子と時を共有した教員はほんの一握りになりました。東校舎、西校舎と言っても通じません。南22条近辺の商店街、路面電車から眺める西線沿いの景色を知っている教員は本当に数少なくなりました。これも時代の流れなのでしょう。

移転してから間もなく、札幌校は国際交流に取り組みました。今では他のキャンパスや大学でも普通に行われていることですが、教員養成大学の国際化は当時としては画期的なことでした。交流協定を結んだ大学のなかでイギリス・ロンドン大学、中国東北地方のハルビン師範大学、瀋陽師範学院（当時）との交流は特筆すべきでしょう。これらの大学と交換留学生制度を検討し、また教員の相互訪問等を行い、本学の国際交流のパイオニアとなりました。中国からの留学生は今では帰国後、母校のリーダーとなって活躍しています。実に喜ばしいことです。

平成4年には大学院教育学研究科を岩見沢校と共同で設置しました。念願の大学院生が学ぶキャンパスとなりました。平成11年の改組、18年のキャンパス再編成を経て、冒頭述べました平成27年教員養成改革となりました。このような30年の歩みを、先人たちの活躍を記念誌に残す義務と責任を感じました。記念誌発行に際しては会員の皆さまに情報提供等をお願いすることが多々あるうと思いが、ご協力のほど宜しくお願い致します。

末筆となりましたが、北師同窓会の諸先生方にはこれまでと同様に本学の教育・研究活動に引き続きのご支援、ご協力をお願いし、挨拶の結びと致します。



想いを

## 「紡ぐ」ということ

専務理事

小路 徹

教師になってから周年行事に係ることが比較的多かったように思います。現在も所属校の開校三十周年を間近に控えています。学校の歴史を紐解き、原点に帰帰できる貴重な経験だと感じています。また、周年行事に関わる時はいつも、歴史や伝統を創ってきた人々の想いと、それを紡いでいくことの大切さを感じています。

学校の中で私たちは一人の教師として子どもたちに接していきま。しかし、子どもたちと接しているときの私たちには、必ず学校を創ってきた先人の想いがバックボーンとして支えてくれているのだと実感します。特に、子どもが教師の力以上の成長を見せるとき、その背後にある、紡がれてきた伝統を感じます。子どもたちが、自然とその学校の児童・生徒らしくなり、校風を身に纏っていくにつけ、紡がれてきた文化を自分も未来に向かって紡いでいかななくてはならないと考えます。また、支えてくれる想いがあるからこそ、私たちは安心して、肩の力を抜いて、自然な姿勢で児童・生徒に接することができ、持っている力以上のものを出すことができるのだとも感じます。そのように考えますと、人は「想い」に支えられながら「想い」を紡いでいく使命があるのだと実感させられます。

北師同窓会の専務理事を仰せつかった春先、自分の役割を模索しながら、そのような想いを感じていました。北師同窓会も紆余曲折を経ながらも一般社団法人北師同窓会として素晴らしい再出発ができたのは、法人移行実行委員会の皆様や会員の皆様、諸先輩の皆様のおかげがあったからであり、それらの想いを確かに次に「紡いで」いければと願っています。

北師同窓の絆は長い時間の中で先輩後輩の間で紡がれた縦の糸と、同じ時間を生きた同期によって紡がれた横に糸で織りなす一枚の布のようなものだと考えています。その織りなした布は強く、しなやかで、温かさを持ち、我々の人生に大きな安心感と児童・生徒のために活動する大きな意欲を与えてくれます。そして、これからもより大きな布へと編み上げられていくのだと思います。そこに織り込まれているのは教育への想いと、まさしく「純剛」の精神なのだと思います。私もその布を織る一本の糸として、強くあらねばならぬと感じます。強くあるためには自分自身の想いを確かにもち、そこに先人や後輩の想いを紡いでいくことだとも感じています。そのため同窓会という場で多くの同窓の仲間と共に、子どもとその未来を語り、多く想いを感じ、絆を深めていければと思います。

時代は今までも増して変化の激しいときを迎え、予測困難な時代の様相を呈しています。教育におきましても多くの課題が累積され、その解決に迫られています。このような時代だからこそ、次代を担う子どもたちのために同窓の仲間として、より親密に情報を共有し、意見を交わし合うことで、様々な想いが紡がれ、絆が強くなっていけるように願い、力を尽くしていきたいと考えています。



## 「ひとりの思い」 「一人一人の思い」 「みんなの思い」

北海道教育大学

阿部 宏行

昭和五十二年卒

### 1 子どもの「思い」は「命」

教育は「命」を扱っています。教室には、子どもの「命」が息づいています。現在の学校教育の底流となっている「新しい学力観」(注1)の策定の深くかかわった西野範夫(元図画工作科教科調査官)は「思い」という言葉に教育の変革を託しました。当時を振り返り「思い」は「命」と記載したかったが、公の文書には載せられなかったと述べています。

私たちが「授業で子どもの思いを受け取る」と協議会での話題になります。その時の「思い」とは「命」と置き換えても同じ使い方でしょうか。

平成23年3月11日の東北震災の直後のテレビから流される情報を信じられない思いで見聞きしていました。当初の報道は、地域の名前と負傷者の年齢など、個人が見えました。しかし、ある瞬間から、「30名ほどの下校途中の…」と、数値に変わっていききました。それほど悲惨な事故であり、甚大な被害であったことは、時間が経つほど明らかになってきました。人の命が数値に置き換えられた、その瞬間から、一人一人の命が私自身から離れていきました。

「ひとりの思い」「一人一人の思い」「みんなの思い」と並べて、その「思い」を「命」に置き換えて、もう一度読み止めてみてください。子どもの顔や表情そして息遣いが薄れていきませんか。それ

は、「子どもの個性や個人が薄れていくこと」と同じなのです。先生は「授業全体を動かす」ことが求められますから「みんなの思い」で動かすことが多くあります。しかし、そのことは「ひとりの思い」が薄れている事実を自覚していなければなりません。ですから、「みんなの思い」の中に、子ども一人一人の思いを紡ぎ、編み直す営みが「授業」なのです。そして、先生は、子どもひとりの思いを感じ取る「感性」を持ち合わせていなければ、子どもの「命」を感じることはできません。子どもは「自分の思いは先生に伝わっている」という前提で、教室の自分の席に座っています。自分の心の居場所を感じているからこそ、自分を表現できるのです。「教育」は子どもの「命」を支え育むものでなくてはならないのです。

### 2 「子ども」に立つ教育

教育の根幹は、民主主義であり、「個人」の尊重の継承です。しかしながら「教育」は、市場原理、効率主義、経済優先など大人の論理が優先され、置き去りされています。世界に眼を転じると、戦争や貧困などによって「子ども」が犠牲を強いられています。

村上春樹が、2009年2月エルサレム賞の受賞の言葉「壁と卵」(注2)があります。「もしもここに硬い大きな壁があり、そこにぶつかって割れる卵があったとしたら、私は常に卵の側に立ちます。」さらに我々は、かけがえのないひとつの魂と、それをくるむ脆い殻を持つた卵で、多かれ少なかれ、硬い大きな壁に直面していると続いています。常に子ども一人一人の命に立つ教育でありたいと願うばかりです。

さて、日頃から全道の同窓の方々には、教育実習の受け入れ、新規採用に向けた学習会など、様々な面で札幌校へのご支援をいただきありがとうございます。今後ともよろしくお願いいたします。

(注1) 文部省『小学校教育課程一般指導資料 新しい学力観に立

つ教育課程の創造と展開』東洋館出版 1995

(注2) 村上春樹『村上春樹 雑文集』新潮社 2011